

みんなで考えた。一から検証した。 新しい医療空間と、大切なトイレ空間。

足利赤十字病院は、両毛保健医療圏において最大の診療科目と病床数を有する基幹病院として発展を続けてきました。建物の増改築や高度医療機器の整備を繰り返すなかで、次第に敷地が手狭になり、建物も老朽化。災害拠点病院として、万一の大規模災害にも対応できるように、2011年4月、足利競馬場跡地の南西側に、新しい病院を竣工させました。災害に強く、環境に優しく、地域の人々が安心して過ごせる療養環境として、7月1日からスタートしています。



回復期リハビリ病棟の車いすトイレ。十分なゆとりの広さがあり、取り付け位置をよく検討された手すりや背もたれなどが設けられている。とても明るく清潔感があり、壁掛便器、巻上巾木など、清掃のしやすさも考慮されている。

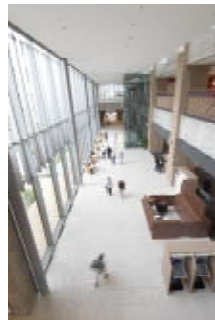


正面玄関側から見た建物外観。左に見える高層の建物が病棟、右の手前が外来棟となっている。

- [足利赤十字病院]
- 竣工年月/2011年4月
 - 所在地/栃木県足利市五十部町284-1
 - 施主/足利赤十字病院
 - 設計/株式会社日建設計
 - 施工/清水・渡辺・大協特定建設工事共同企業体
 - 病床数/555床
 - 延床面積/51,804.46㎡
 - 構造規模/RC造、免震構造 地下1階、地上9階、塔屋1階

成長と変化に対応できる分棟構成。 地域中核病院としての災害対策を実現。

病棟、外来棟、中央診療棟、エネルギー棟、講堂棟などの分棟構成にすることで、医療の高度化による改修や増築への対応を容易にしています。同時に、患者さんを守るためのセキュリティ管理も強化。さらには、災害拠点病院としての責務を果たすために、免震構造などを採用しています。敷地の周囲に柵を設けず、地域との間に垣根がないことも特長です。



開放感あふれるエントランスロビー。



病棟、中央診療棟、外来棟、ホスピタルモールには免震構造を採用。



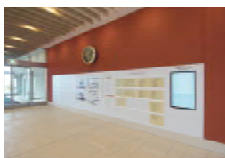
講堂における災害時対応

- 多くの患者さんを同時に受け入れられる空間の確保
 - 非常時には外からも直接出入りできるレイアウト
 - 医療ガス設備を4カ所に配管（右写真）
 - 空調は床暖房・床冷房を採用
 - 感染対策として空気の容積を大きくするため天井を高く設定
 - ステージの下には簡易ベッドを用意する予定 など
- 他の空間や建物全体のシステムでも、さまざまな災害対策が施されています。



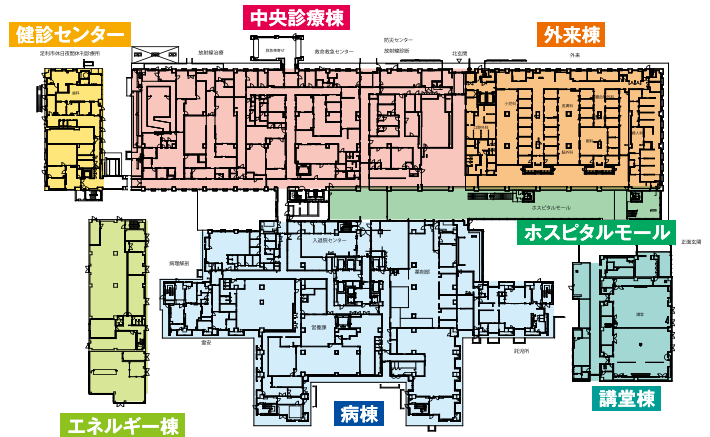
光と水と風と緑を活用する、 地域に根ざしたグリーンエコホスピタル。

省エネと自然エネルギーの利用につとめ、太陽光発電や風力発電、屋上緑化を導入。次世代型グリーンホスピタルを構築し、国土交通省の「住宅・建築物 省CO₂推進モデル事業」の対象として、全国初の省CO₂推進モデルの病院に選ばれました。旧河川敷で地下水が豊富であるため、年間を通じて水温がほぼ一定である地下水のエネルギーを使った空調システムも完備しています。



右/エントランスロビーの電子パネルでは、それぞれの自然エネルギーの発電量などがリアルタイムに表示されている。

左/風力発電の風車の色は、大規模災害を想定したトリアージカラーになっている。地元の足利工業大学にも風車があり、北関東自動車道を走ると、左の大学にも、右の病院にも風車が見えるという壮観な風景を想定してつくられた。



1F平面図

セカンドオピニオン設計によって 医療の場の新しいカタチを模索。

新しいモデルとなる病院づくりに大きな情熱を持たれる日本全国の大学の先生方が、月に一度土曜日に足利に集まり、総勢160名の病院の委員と議論しながらプロジェクトを進めました。職員を対象にした建築講座も開講して、一人ひとりの興味・関心を高めながら、複数のワーキンググループを立ち上げてさまざまな事項を検討。さらには全職員に向けたアンケートを実施するなど、職員全員参加型の病院づくりが行われました。

Voice 事務部長様・企画課長様からの声

まさに夢から現実への、着実なプロセスでした。



足利赤十字病院
事務部長
企画課長(兼)建設準備室



驚見圭司さん(左)
石原匡司さん(右)

「夢を現実にしていこう!」と、当病院のドメインであるOur Dream & Our Hospitalの頭文字をとって「D&H」と名付けた職員向けの情報紙を、移転に際して定期的に発行しました。夢は夢で終わってはいけませんから、タイトルロゴのDがだんだん小さくなり、Hが大きくなっていきました。

既存の病院では敷地が狭く、施設にいろいろな限界もありました。新しいスペースがあればいいですが、病院には患者さんがいますから、「こわしてから、つくる」わけにはいかず、必ず「つくってから、こわす」ことになります。そうしたときに、市のほうから移転のお話をいただきました。そこで医療建築の大御所である長澤泰先生、山下哲郎先生、寛淳夫先生に相談して病院の方向性をまとめ、その後も多くの先生にご参加いただいて基本構想・計画を策定しながら、移転プロジェクトを進めていきました。



情報紙「D&H」。タイトルからDが消えてHになったのが、最終の20号である。



開口部が広くて明るい個室。トイレは部屋の奥に、洗面器は手前に備えられている。壁の下をくり抜いて双方から使えるゴミ箱も便利である。



トイレの扉はマルチ折戸で、体を預けるだけでスムーズに開くバリアフリー設計。手すりの位置や間口の広さは介助しやすいように考えられている。

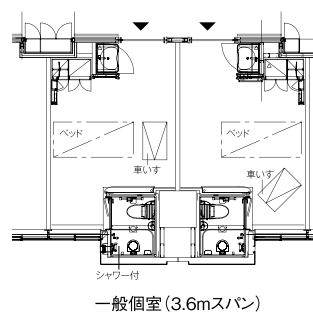
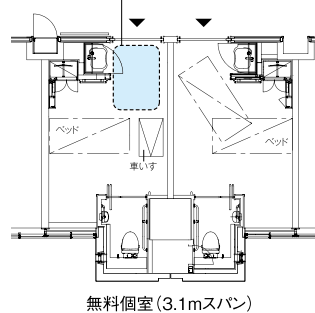
全室個室。全個室にトイレを設置。 トイレは窓側に、洗面器は廊下側に。

一般病室は基本的に全室個室とし、全個室にトイレを設置しました。トイレやユニットシャワーは窓側に設置しており、入口廻りがデッドスペースとならずに医療行為に使える広めのスペースとして確保することや、ベッドの出し入れのしやすさなども考慮しました。開放感があり、患者さんの視野も広がるレイアウトです。洗面器は入口側に設置し、入室時にすぐ手洗いができるように工夫されています。

病室の最小単位として最初は幅3mのスパンを想定していましたが、車いすの通行を考えて3.1mのスパンに。トイレが外に突き出しているようなレイアウトで日射の遮蔽効果もあり、環境建築のイメージも醸し出しています。また開口部は、足元から天井までの窓を設けることで、ベッドからの眺望と採光性を高めています。

通行スペースとしてだけでなく
医療行為スペースとして有効利用

スムーズなベッド移動が可能



Voice 設計担当の方からの声

モデルルームをつくり、半年以上みんなで検証しました。



株式会社日建設計
設備設計部門 設備設計部 主管

塚見史郎さん(左)

設計部門 設計部

高嶋玲子さん(右)

「成長と変化」に対応できる構成・設計を考えていきました。病室やスタッフステーションなどは、大きいプレハブの中にモデルルームをつくり、半年以上に渡って検証しました。一つひとつの材料を、納得するまでこだわって、いっしょに決めましたね。

「これからの世代は、最初から個室を与えられて育っているから、全室個室が当たり前になるだろう」と、かなり先取りした考え方を推し進めました。個室化することで感染の問題はもちろん、4床室での男女同室を避ける部屋移動や窓側と廊下側といった格差、音や臭いなどの問題が考慮されました。

トイレ設計のポイント

- 全室トイレを実現 → すべての個室にトイレを設置
- 節水便器の採用 → 洗浄水量の少ない便器の採用
- 清掃性の向上 → 壁掛便器、巻上巾木などを採用
- スタッフ用トイレ → スタッフのプライバシーを考えた設計
- バリアフリー設計 → 段差をなくし車いすがスムーズに通行
- 手洗いについて → ほぼ非接触の自動水栓を採用
水の出る時間や流量なども細かく検証



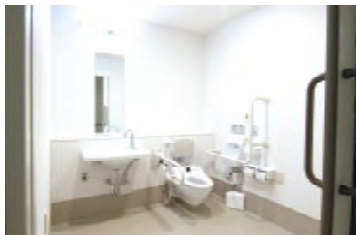
回復期リハビリ病棟の4床室。個室感覚の広いスペースであり、家具が間仕切りになっている。壁側にベッドを付けることによって転倒を防止。車いすの患者さんが使いやすい中央に洗面器を置き、手すりによって立ち上がる行為をサポートしている。

病棟の特性によってトイレを配置。

例えば、回復期リハビリ病棟(50床)にはトイレを21カ所設置。そのうち車いすで使えるトイレは8カ所もあります。また、自分で車いすでトイレが使える人に向けて、ドアのところに「左が使える人」「右が使える人」と明示されているので、一人ひとりの患者さんの使いやすさが大きく向上しています。



左右どちらが使えるかを文字で明記。



回復期リハビリ病棟の車いすトイレ。

Mini Voice 移転でパジャマが売れたというお話



前の病院から285人の患者さんを移送したのですが、今までの大部屋から個室になるということもあり、「こんなきれいな部屋に、こんなパジャマではダメだ」と、ご家族の方が近くの洋品店にパジャマを買いに走り、普段の4倍くらい売れたと聞きました。その気持ちがとてもうれしいですし、ずっと忘れずにいたいお話ですね。移送では精神科の患者さんが心配でしたが、環境の良さもあってか、当日こちらに到着したらとても落ち着いていたとスタッフから聞いて、改めて環境の大切さも学びました。



緩和ケア病棟の個室は、まるで家庭にいるような落ち着いた雰囲気。病状が進行していく姿を見たくない人のために、鏡を隠せる配慮やドラフトを感じさせない天井放射式冷暖房としている。

Voice 看護師長さんからの声

静かで快適で、声をかけあえる環境になりました。



足利赤十字病院
看護師長
大木啓子さん

私は回復期リハビリの担当ですから4床室のスペースもあるのですが、家具で仕切りがされてプライベートを確保できるようになっています。ご家族の方にもご満足いただいていると思います。

新しい病院になり、二重ガラスで静かな環境になったことも大きいですね。前の病棟では夜中に救急車が入って来ると、音を気にされる患者さんもありましたが、今では救急車の音が聞こえないんです。快適に過ごしていただけていると思います。トイレは一つひとつの空間が広がって、車いすでも動きやすくなりました。スタッフステーションがオープンカウンターになって、患者さんと声をかけあう距離がさらに近くなったこともよかったですと思います。



建物の廊下は広くて通行しやすい。療養型フロアのデイルームも広く、手洗いのスペースも充実している。



小児科病棟の親子トイレ。子どもに合わせたサイズを採用。



外来のトイレの数も多く、きれいで充実している。



外来受付のカラーは、渡良瀬川の夕陽をイメージした茜色。検査・救急の受付は天空の青、入院病棟の受付は若草色。すべて足利の色である。



デザインと機能を兼ね備えた、外来の多機能トイレ。災害などで電気がストップした場合を想定して、非常時対応機能も備えられている。